

令和4年度 学校自己評価書

鈴鹿市立加佐登小学校

評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
学力向上	1 個に学びを定着させる授業づくり ・提案授業を年6回行う。 ・授業公開を全職員が行う。 ・自主研修会を定期的に行う。 ・めあてとふり返りによる授業内容の定着 →職員アンケートによる検証 →児童アンケートによる検証 2 新学習指導要領に即した授業改善 ・算数での主体的・対話的な学びのある授業づくり →児童アンケートによる検証 (成果と課題) ・提案授業6回、授業公開全員、自主研修会月1回を実施した。 ・職員アンケート「授業でめあて・ふり返り活動が行われ、授業内容の定着が図られている。」89.9% ・算数アンケート「授業の最初には分からない問題も、授業の最後には分かるようになる」80%以上。 (1年89.5% 2年94.4% 3年92.5% 4年93% 5年92.6% 6年95.7%) ・算数アンケート「友達の考えを聞くことは楽しい」80%以上。 (1年94.8% 2年94.1% 3年95%) ・算数アンケート「自分の考えを積極的に発言したり,仲間の意見から新しい考えを取り入れようとしている」80%以下。 (4年78.3% 5年79.5% 6年66.6%) 話し合う活動の工夫や話すスキルの指導が課題。また、アンケート項目が答えにくいことも課題。	・職員の取り組みが児童アンケート結果に成果として表れており高く評価できる。引き続き児童にとって「楽しく」「分かる」授業の実施に取り組んでほしい。 ・授業の初めに「めあて」が、最後に「ふりかえり」があることはよいことだ。子どもが今何を学んでいるのかを把握でき集中力も上がる。 ・授業見学から、児童が先生の発問に対して自分の考えを発表する場面をたくさん見た。日ごろから児童の興味を引き出す工夫をしている成果だと思う。 ・アンケートの設問を修正し検証を進めてほしい。(複数) ・児童高学年アンケート6年生が極端に低いのは、この学年の一過性のものなのかしつりと検討してほしい。 ・コロナ禍だからこそ対話は大切。「積極的な発言」が否定的ならばディベート形式などを取り入れてはどうか。	・研修会では、ICT機器を効果的に活用した授業実践例を交流していく。 ・「分かる喜び」「学ぶ楽しさ」を実現する授業づくりが研修テーマなので、アンケートの項目に「算数の授業が楽しい」を入れることを検討。 ・回答しにくかった児童アンケートの項目は「自分の考えを発言しているか」と「友達の意見を聞くことで新たな考えに気づくことがあるか」に変更。 ・今後も、ペアやグループで話し合う時間を確保し、その後全体で練り合い友達と一緒に高め合う授業を目指す。また、自分の考えを持ちにくい児童への支援を考えていく。 ・話すスキルを指導したり、ディベートの授業に取り組んだりする。 ・どの子も安心して過ごしたり発言したりできるクラスづくりを進める。
ICTの活用	1 教育ICTの日常化 ・ICT機器を用いた効果的な授業づくり →週3回以上、授業で活用。 →ICT支援員を積極的に活用。 →研修会を定期的に行い、職員のICT活用指導力の向上を図る。 →児童アンケートによる検証 ・長期休業中にクロームブックによる課題を実施する。 (成果と課題) ・週3回以上は教師がクロームブックを授業の中で使用した。 ・ICT支援員の活用は職員の半数にとどまった。具体的にどのような連携方法があるのかをICT部を中心に模索する必要がある。 ・ICT活用に関する研修会を6回実施した。 ・長期休業中に全学年でクロームブックを活用する課題に取り組んだ。 ・算数アンケート「ICT機器を使った授業は分かりやすい(低学年)」 「授業でICT機器を使うと役立つと感じる(高学年)」80%以上。 (1年89.5% 2年92.1% 3年85% 4年95.8% 5年95.1% 6年91.3%)	・画面に児童の意見が写し出される授業を見て、先生が研修会等で活用方法を学んでいるからこそだと思った。 - とらわれず、今後も柔軟に新しい技術を活用応用していったほしい。 ・ICT支援員の活用が教職員の半数にとどまっている。来年度に向けて具体策を練り半数以上達成してほしい。 ・子どもたちもクロームブックとの付き合い方がじょうずになってきて、先生は大変だが、以前はできなかった教育を幅広く学ぶことができている。	・「支援活動連絡シート」の利用を進めてICT支援員を積極的に活用する。打合せや学年部会で声をかけるが、職員全体でどのように活用していくのか検討が必要。 ・今後も、ICT機器の活用法について、校内や校外の情報を職員全体で共有する研修の場を設ける。 ・児童用クロームブックの故障が増えている。ICT機器の活用方法を毎年、指導していく必要がある。
不登校対策	1 組織的・継続的な特別支援教育 ・個に応じた支援の方向性の共有・継続 →支援が必要と思われる児童の情報交流会を月に1回実施する。 →必要に応じて随時校内支援委員会やケース会議を開催する。 →該当児童の支援計画作成を100%とする。 2 児童が連絡無しで登校していない時の保護者への確認の徹底 (成果と課題) ・情報交流会を月に1回実施した。全職員が該当児童の様子や行動を把握することで、学校全体で見守りながら改善策を考えて対応することができた。 ・状況に応じて校内支援委員会、ケース会議、保護者を交えての支援会議を開催した。 ・支援計画は100%作成された。 ・児童が、連絡無く登校していない場合、担任から職員室に報告し、職員室にいる職員が保護者へ電話連絡することを徹底した。	・目標を達成している。引き続き該当児童の状態に適した対応を続けてほしい。	・今後も、児童の様子について定期的(月に1回)に情報共有することで、学校として児童や保護者に適切な対応ができるようにする。 ・スクールカウンセラーや他の専門機関との連携を大切にし、専門的なアドバイスも取り入れながら支援を進める。
地域連携	1 安全安心対策 ・地域(学校運営協議会、まちづくり協議会、自治会等)との連携体制の構築 2 学校運営協議会での協議に基づく改善 ・活動内容の周知 →保護者及び教職員アンケートによる検証 3 地域の教育力の活用 ・学校ボランティア活用の推進 →学習支援・読み聞かせボランティアの活用場面を昨年度より広げる。 (成果と課題) ・地域の見守りボランティアの方に毎日の下校時刻等をメール配信で知らせた。また毎朝、見守りボランティアの方と情報交換を行った。 ・危険個所対応や防犯カメラ設置などを、地域やPTAと意見交換を行いながら進めた。 ・学校運営協議会やその活動の周知率は、保護者はR3:52.3%→R4:53.2%で、活動内容が十分に伝わっていない。教職員は100%。 ・学校運営協議会での意見を教育環境改善に生かした。 ・PTA役員2名が学校運営協議委員に入り、保護者の意見も学校運営協議会に反映された。また、毎月のPTA役員会で会長が学校運営協議会の内容を還流報告した。 ・読み聞かせ・学習ボランティアの活用回数や延べ人数が昨年度より増えた。ただ、活用場面(種類)に広がりがなかった。(読み聞かせは12日間延べ58クラス、学習支援は15回活用。)	・地域に学校の情報を発信したり共有するなどして、児童の安全安心につながられていると評価できる。 ・PTAでも役員に情報共有をした。 ・学校運営協議会にPTA役員2名が加わったことは、児童の保護者としての視点もあり、議論が広がり活性化されてよかった。 ・自治会、まちづくり協議会は全面的に協力させてもらう。 ・祖父母も巻き込んで「学校」に興味を持つ人を増やし、教職員の頑張りを見てもらえるようにしていきたい。 ・地元の人の輪を広げるために学校に近寄ってもらえる行事を児童と共に考えていかなければならないと思う。 ・図書、読解力などが大きな課題だと思うので、ボランティアをそこに集中させてもよいと思う。	・児童の安全を確保するために、見守りに参加していただくよう継続して地域へ働きかけていく。 ・白鳥中学校区学校運営協議会では、中学校区内の各校の安全安心の取組を交流する予定である。来年度の学校運営協議会では、安全安心の取組をテーマの一つにして、他校の取組例を参考にしながら協議を行う。 ・ボランティアの方に見通しをもって参加していただけるよう、ボランティアによる支援を希望する学習単元や内容の年間計画を立てる。